

〈新しい女〉としての Lady Wilde

貝嶋 崇

オスカー・ワイルドの母ウィリアム・ワイルド卿夫人像を「新しい女」の視点から考察し、オスカーに与えた影響を考察した。まず、ここで用いる「新しい女」とは、時代と場所を19世紀後半のイギリスに限定し、その中でも、女性の権利や教育などの当然の権利を主張するその時代の封建的、古典的な女性像から見て、「新しい」女性像を意味する。勿論、18世紀の女性活動家のメアリ・ウルストンクラフトを登場させるまでもなく、女性の権利と教育を女性の立場から、援護し、当然のものとして革命的に要求したものは、それ以前から存在したのは事実である。しかし、歴史的な事実として、19世紀末に特定してみると、女性の権利の拡大に伴い、新たな女性像が出現したのも、無過ごすことはできない。それは、特に法制度の改革に見られる。1882年にグラッドストーンにより通過した法案は、既婚女性の財産権を担保するものであった。それ以前は、事実上結婚時以降の妻の財産にはすべて、夫の支配が法的に及んでいたのである。こうした、経済的な自立によって、夫からの精神的な自立とともに、女性の権利の拡充がなされ始めたのである。ルス・ボーデン (Ruth Borden) は、19世紀末の「新しい女」の特徴として、特に、そうした経済的な自立に加え、女性の職業にも重点を置いている。

そうした「新しい女」として、Vlasta というペンネームで雑誌『クライシス』に投稿していたアンナ・ホイラー (Anna Wheeler) をあげることができる。また、1839年の議会にむけてロジーナ・ホイラー (Rosina Doyle Wheeler, プルワー・リットン卿夫人) は、An Address to Both Houses of Parliament, for the Suppression of Old Women of Both Sexes というタイトルで発表した。彼女自身、リットン卿を批判する言動から、精神病院に7年間強制隔離された。これは、圧倒的に強い権力を持つ「夫」に対して批判的な立場をとることが、当時いかに危険なことだったかが容易に推測できる事件である。1882年に、先ほどの既婚女性財産保護法案が可決されたのと奇しくも同年に亡くなっている。

そうした先達に影響を受けて、ワイルド卿夫人自身、Lady Jane Wildeとして、

1893年に、『女性の軛』(The Bondage of Woman) と『アイルランドのリーダーと殉教者』(Irish Leaders and Martyrs) を発表している。1876年に、夫を亡くしてから、彼女は、ずっと、子供とともに自活しなければならなかった。彼女の結婚式には、新婦側の出席がほとんどなかったことから、親戚にあまり祝福されてなかったとの噂もあったが、そうした親戚からの未亡人としての彼女への支援はほとんど期待ができなかったのが実情であろう。彼女は、夫が子供たちに対して残した遺産が頼りだったのである。

わたしは、「新しい女」としてワイルド卿夫人を考える場合、彼女の3つの名前をキーワードとして挙げた。ジョン (John Fenshaw Ellis) とスペランザ (Speranza) とワイルド卿夫人 (Lady Wilde) である。ジョンは、17歳でスペランザというペンネームを使い始めるまで用いていたペンネームである。男性名のペンネームで、彼女は、雑誌『ネイション』に、アイルランドへの忠誠を誓いその独立を促す過激な詩を投稿した。その理由は、女性が政治に口を出すことが社会に反すると思われていたことと、女性名で投稿するよりも、掲載される可能性が高いと考えたからである。こうした工夫もあり、彼女の詩は公の雑誌で発表された。彼女は、後に、『女の軛』の中で、「プラトンの講義に出るために、男子学生に変装した古代の女性たち」を引き合いに出している。男性のペンネームを使ったことも、彼女は嘘も方便として正当化していたのだろう。また、少女時代から、歴史と政治に興味と関心を示していたのも、こうした行動の要因として当然考えられる。こうしたことは、勿論、シェークスピアの戯曲にも男装をする女性は現れるが、母親の「性の転換」は、オスカーにも直接影響を及ぼしている。

スペランザのペンネームを得て、すなわち、彼女が17歳を過ぎてから、アイルランド独立を支持する愛国的な詩をますます過激に発表するようになった。おそらく、女性が政治がらみの過激な詩を書くこと自体が、大きなセンセーションを巻き起こしたのであろう。従って、その名声は、遠くアメリカまでも及んでいた。息子のオスカー・ワイルドが、1880年代にアメリカでの公演旅行を行った際に、アメリカでは、彼はスペランザの息子と紹介された。アメリカに在住するアイルランド人にまで、鮮烈な印象をスペランザは与えたのである。

ワイルド卿夫人という肩書きは、医学上の卓越した技量と夫の国勢調査への功績が評価されて夫がナイトの称号を授与されてからのことであるが、その他にも、その名は、妻としてまた、母としての二重の役割をも意味する。1864年に発覚したメアリー・トラバース事件で、夫のワイルド卿が、レイプ犯として有罪になる。メアリーは事件後もワイルド卿の診察室を訪れていることもあり、その罰金は、

最低額の4分の1ペニーと少なく、実質は、メアリーの敗訴に近い状態だった。しかし、この事件は、社会的にワイルド卿を葬り去ったのである。この事件の発端も、ワイルド卿夫人がメアリーに対して、後のオスカーと同様に、名誉毀損で訴えたことから始まる。彼女が訴えた理由は、メアリーが、子供のウィリーやオスカーに直接接触を試みるようになったからである。自らの子供をスキャンダルから守るというワイルド卿夫人の母親としての決断で、最終的には事件は公になり、夫は社会的な制裁を受けたうえに、妻としての立場は一層苦しいものになった。この事件から、彼女は妻としてよりも母親としての立場を優先させたことが明らかである。

この事件から彼女が学んだものは、1893年に出版された15の論文からなる評論集 *Social Studies* に表されている。その中で、まず、彼女が強調していることは、女性の教育問題に関するものである。最終的には、高等教育にまで、踏み込んで、学長や教授まですべて女性の女の大学を提唱した。そうした知的女性たちは、家事から解放され自由が与えられるべきだと主張している。また、知的な女性にとって、社会から行動の自由を奪われることは容認できないとした。アルフォンス・ドードから引用し、「結婚状態」は知的生活の障害になると主張した。さらに前述の1882年の既婚女性財産保護法案を高く評価し、爾後、結婚制度のために、女性は、奴隷にも公民権を剥奪された存在にもならないだろうと希望している。女性の知性の正当な認知を求めているし、また、女性教育のあり方も当然視野に含んでいる。これは、オスカー・ワイルドの女性観に影響を及ぼした。政治運動にも興味を示したコンスタンス・ロイドとの結婚もこうした母親の影響だと見える。

また、アメリカの女性の立場を、イギリスの女性の立場と比較し、伝統に縛られない、正確に言えば、彼女らの伝統のない自由さを尊んだ。さらに、イギリス女性は、アメリカの女性が持っているような、自由と平等を手に入れるべきだと主張し、そうなれば、女性は自立と尊厳を勝ち取ることができると説いている。一方で、軽蔑をしていた新興国アメリカに対して、ワイルド卿夫人は、正当な評価をしていた。こうした一連のアメリカ文化を意識した発言は、オスカーにどのような影響を与えたのか、また、逆にオスカーから影響を受けたのかは、はっきりとはしないが、少なくとも、彼女の当時のサロンでは、アメリカへの嫉妬からくる軽蔑の多い中で、ワイルド卿夫人自身の感じたアメリカ女性への正当な評価ではないだろうか。彼女は、後にオスカーの伝記を書くことになるアメリカ人女性ブレモン伯爵夫人をサロンに自由に出入りさせていたし、友人と見なしていた

ことから明らかであろう。

また、ワイルド卿夫人の英雄的な男性性もあげられる。これは、オスカーに大きな影響を与えた。夫の早すぎる逝去に伴い、ワイルド卿夫人は、母親の役目と同時に、父親の役割を果たさなければならなかった。オスカーが有罪判決を受けた後に、オスカーのフランスへの逃避行をやめさせた時にもそのヒロイズムが顔を出した。イエーツによると、「もし、留まれば、たとえ監獄に収監されようと、あなたはいつまでもわが息子であり、愛情にも変わりがありませんが、もし、逃げるのならば、わたしはもう今後二度とあなたと口をききません」と述べたそうである。名誉と責任を重んじるこうした態度は、オスカーにも伝わった。ワイルド卿夫人を知るヘンリエッタ・コークランは、彼女が孤独を好む一方で、彼女の機知に富んだトークに強く惹かれたことを告白している。晩年、自分自身赤貧にありながらも、ワイルド卿夫人は、自分よりも貧しい人に救いの手を伸ばしたとある。こうした、ヒロイズムや自己犠牲の精神は、『ヴェラ』などオスカーの作品にもちりばめられている。

結論として、「新しい女」としてのワイルド卿夫人は、「男性性」の見られる女性だった。すなわち、男性化した女性としてのワイルド卿夫人は、「新しい女」として、オスカーの人生観はもちろんのこと、作品にも多くの影響を与えた。『サロメ』や彼の喜劇の中にもその適例を見いだすのは容易であろう。これは、単に女性の男性化だけを意味するものでもなかった。それとは逆に、オスカーの中には、女性化が顕在した。彼の服飾や日用品や調度品に関するこだわりは、一つの例であるが、彼の劇作の中での、女性の登場人物の台詞にもそれは強く織り込まれている。これは、一見、性の逆転のようであるが、実は「性」という垣根がオスカーの中で、低くなっていたことを表している。「新しい女」である母ワイルド卿夫人を通して、オスカー・ワイルドは、「性」という垣根の無意味さを学んだのではないだろうか。最初は、男性としてポーズをしていたワイルド卿夫人は、“I must now pose as ‘the mother of Oscar’”といったとされるが、オスカーもまた、母を人生のモデルにしたとブレモン伯爵夫人に言わしめている。従って、「新しい女」としてのワイルド卿夫人は、性を超えた世界へとオスカー・ワイルドを導いた一因といえよう。

References

Anna, Comtesse De Brémont (1911) *Oscar Wilde and His Mother: A Memoir*, Everett & Co., Ltd, London.

- Bordin, Ruth (1993) *Alice Freeman Palmer: The Evolution of a New Woman*, University of Michigan Press, Michigan. Online. Internet. 10 January 2005.
- Ellmann, Richard (1987) *Oscar Wilde*, Hamish Hamilton, London.
- Knox, Melissa (2001) *Oscar Wilde in the 1990s: The Critic as Creator*, Camden House, Suffolk.
- Melville, Joy (1999) *Mother of Oscar: The Life of Jane Francesca Wilde*, Allison & Busby Limited, London.
- Powell, Kerry (2003) "Wilde's The Woman's World and the Culture of Aesthetic Philanthropy," *Wilde Writings: Contextual Conditions*, ed. by Joseph Bristow, 185-211, The University of Toronto Press, Toronto.
- Schaffer, Talia. (2000) *The Forgotten Female Aesthetes: Literacy Culture in Late-Victorian England*, University Press of Virginia, Charlottesville and London.
- Small, Ian (2003) *Oscar Wilde Revalued: An Essay on New Materials & Methods of Research*, ELT Press, Greensboro.
- Stetz, Margaret Diane (2004) "Oscar Wilde and Feminist Criticism," in *Palgrave Advances in Oscar Wilde Studies*, ed. by Frederick S. Roden, 224-245, Palgrave Macmillan, Hampshire.
- Wilde, Lady (1893) *Social Studies*, Ward & Downey, London.
- Windham, Horace (1951) *Speranza: A Biography of Lady Wilde*, T.V. Boardman & Company Limited, London.